ひと・まち・自然

トラまち Press
（財）世田谷トラストまちづくり情報誌
Vol. 10
Spring 2013

特集

世田谷の生き物を記録する

自然を記録することで未来へつなげる

まちの中の身近な自然を見続ける意味

常喜 豊

せたがや散歩日和　第10回

大正・昭和の住宅地の風景を探して

上北沢駅～将軍池広場～左内町分譲地～八幡神社～三井牧場跡～桜上水五丁目～桜上水駅へ

結び葉　第10回

井山俊司さん

人も作物も、未来の実りを今育てる

冬の冷たい野川にもたくさんの生き物がいる。まるで川遊びを楽しむように、河川環境を調査する人々の姿。

ボランティアの活動日には、活気が満ちる成城みつ池緑地。写真で行われているのは、コドラート（方形区）調査。

特集

世田谷の生き物を記録する

多様な動植物が生きる世田谷

東京23区内で最多といわれる約86万人もの人々が暮らしを営む世田谷区。その一方で、多くの野鳥の生息が確認され、都内でも貴重なゲンジボタルやイチリンソウの姿を見ることができる。それは市街化が進むなかでも、国分寺崖線や湧水など、多様な動植物を育む自然環境が残されているからだ。

世田谷の自然が守られている理由には様々なものがあるが、そのひとつに、地域に住む人々の手によるボランティア活動の一環として、気温・水温・地温・日照度・水質・土壌・植生・動物など、自然に関する観察や測定を継続して定期的に行っている。その結果が失われないよう、自分たちの手で記録し、まとめられている。

今回は国分寺崖線の森、野鳥、川を守る3つの団体を訪れ、身近な自然を愛し、動植物に寄り添いひたむきに歩み続けている人々に出会った。その姿は調査し、記録し続けることが自然環境を維持していくうえで重要な役割を果たすことを私達に教えてくれた。

調査では紙とペンは必須アイテム。調査項目の結果やその日発見したこと、考察などを記録する。上から反時計回りに、みつ池、野鳥、野川。

オギの美しい多摩川の川原に立つ野鳥ボランティア。望遠鏡で野鳥の種類を特定、飛来数を確認する。

成城みつ池を育てる会

貴重な環境を守るために記録を重ねる多くの手

小田急線成城学園前駅から歩いて約10分。駅前の喧騒を抜けた住宅街の中、うっそうと茂る木々のみどりに鳥のさえずりがこだまする空間がある。そこは、東京都の特別緑地保全地区と世田谷区の特別保護区に指定されている成城みつ池緑地だ。国分寺崖線のみどりと湧水が生み出すその類いまれなる環境は、ゲンジボタルやシュンランなど都内でも屈指の希少な動植物の宝庫となっている。

みつ池に関するあらゆる環境調査を実施するのは、この場所に惹かれ、導かれるようにして集まってきた「成城みつ池を育てる会」のボランティアたちだ。彼らは毎月第2・第4木曜日と第1土曜日に集まり保全活動を行う。みつ池は、貴重な自然を保護するため出入りが制限されており、一般への開放は年4回の観察会に限られている。

活動日の朝、ミーティングが終わるやいなや、メンバーは約2・3haもの広いみつ池の敷地の中へと散らばっていく。こちらで気温と地温を測定するグループが温度計とにらめっこをしているかと思えば、遠く向こうの林の中に分け入り、林の中にどれだけの太陽光が差し込むか、計器で照度を測定する人もいる。敷地内に何カ所かある湧水の湧出ポイントでは、道具で水をすくいあげ、湧き出る水の流量や水質の調査を行う姿も見える。ほかにも水生生物や野鳥、昆虫などを目視で確認する動物調査、キノコに関する調査、土壌を採取し顕微鏡で観察する調査まで、その内容は多岐に渡る。みな、それぞれの興味のあることに関わり、自然とバランスよく役割が分担されているそうだ。自分が知りたいことを真剣に調査する人々の顔は、飽くなき探究心に満ち溢れている。

「調査の結果は、よりよい保全のためにどんな活動をしたほうがいいのか、そしてその活動がどのように影響したかを知る手がかりとなるのです」

そう話す木村嗣枝（つぐえ）さんは夫婦でボランティア活動に参加している。夫の正三さんは幼少時代から好きだった昆虫の調査、嗣枝さんはフェノロジー調査に携わってきた。フェノロジー調査とは、植物の開花・結実の時期や数を調べる調査だ。リストを片手に歩き、その季節に花や実をつける植物を自分達の目で確認していく。仲間同士で仲睦まじく開花を報告しあう様子は、花が咲いたことを分かち合う素直な喜びに溢れている。

「正直、最初は調査することが果たして何に繋がるのか分かりませんでした。でも、長年継続していくことで、その意味が段々と見えてきたのです」

木村さん夫妻がボランティアを始めて18年間、実にいろいろな変化が見られたという。例えば、開花の時期が前後したもの、また、数が増減した植物や昆虫もいる。また一方で、かつて見られなかった種が発見されることもある。

積み重ねた調査の記録からは、貴重な植物の適切な保全方法を見いだすこともできる。ニリンソウの群生地では、調査ポイントを1か所定め、その成育状況を継続的に調査している。地面を帯状に区切り、そこにある植生を確認するコドラート（方形区）調査から、ある年に株数が減少したことが判明。その原因として、群生近くの低木類が茂りすぎているのではないかという考察ができた。その後、保全活動として低木類を剪定した結果、数年後にはニリンソウの増加が見られるようになった。

みつ池を育てる会では、1年ごとに調査記録を報告書としてまとめる。それは世田谷区役所や国会図書館のほか、専門的指導を受けている東京農業大学、首都大学東京牧野標本館などに進呈される。そこから得られる専門家の分析や助言は、みつ池の保全活動を進めるうえで大きな力になっている。

みつ池に関心を持つようになったひとり、首都大学東京の加藤英寿助教も、研究の一環としてみつ池に足を運んでいる。取材日は、地面をロープで5×50m×2か所に区切り、茂みに分け入りながらコドラート調査を行っていた。

1.和やかな空気のなか本日の作業を確認して、活動開始。2.四季の移ろいが手に取るように分かる、フェノロジー調査。3.湧水調査では、水温・水質・流量などを、慎重かつ丁寧に測定。4.コドラート調査は、現在の植生状態の把握や新種の発見にも繋がる。

唯一無二の場所を見守る優しい眼差し。

1.気温調査は希少植物の生育条件を推察するのにも役立つ。温度計は測定ポイントを定めて設置。2.調査時に誰もが一目で分かるように、貴重な植物の生育場所をマーキング。3.照度計の球部を太陽に向けて、林床の明るさを測定する。

「みつ池は地元住民が高い志を持ち、継続して調査を行っています。このデータを保全に役立てることが、私たち専門家の役割だと思います」

みつ池のボランティアの熱意ある活動、そして向学心は専門家からも信頼を得ている。記録を広く認知してもらおうと、自分たちで積極的に行動して、首都大学東京牧野標本館での永久保存が実現した。実物が残る標本も、かけがえのない記録のひとつだ。

みつ池はかつては里山と呼ばれた場所で、人々の生活と密接に関わっていた。薪のために木を切るなど、人の手が入ることで成立していた森林が、やがて放置されるようになったことで、消えてしまった植物もいくつかある。

「みつ池が今までどのように残ってきたか、そしてこの先、どうすればいいのかを、私達のデータから示していきたいのです」

長年ボランティアとして活動に参加してきた美濃葉子さんの言葉に、会が担う使命への強い決意を感じる。現在は、みつ池の植物の総目録となる植物誌の作成に取りかかり始めているという。

「都市の中のこの特別なみどりの空間を、百年先、二百年先まで守り続けていきたい」

その強い想いを胸に、みつ池を守る数々の手は、その膨大なデータを積みあげていく。

誰でもできる自然観察のすゝめ

生きものアドバイザー

山崎裕志さんと歩く砧公園

世田谷在住の山崎裕志さんは、日々歩きながらそこで出会う生き物を約15年間記録し続けている。

「五感をとぎ澄ませること、普通なら見過ごす場所に目をむけること。そうすれば身近な場所にたくさんの生き物を見つけることができます」

山崎さんが生き物の記録を始めたきっかけ、それはジョギングだった。走りながらよく周りを見渡すと、鳥、昆虫、草花……実に様々な生き物が目に飛び込んできた。世田谷にはこんなにもまだ自然が残っているのかと驚き、いつしか、ジョギングはウォーキングに変わり、ついには野帳とカメラを携え記録をしながら歩くことが日課になった。雨の日でも夜中でも生き物との遭遇に胸をときめかせながら、区内の公園や緑地を歩き回り、出会った生き物から季節の移り変わりを感じている。

腐葉土をふるいにかけて落ちた土を持ち帰り顕微鏡でのぞくこと、一見何もいない冬の公園の落ち葉の下が虫たちで賑わっていること、食べる実の好みから木によって集まる鳥が違うこと……。記録を続けてきて、分かってきたことは数えきれないほどある。

自然の中を歩くうちに顔見知りとなった人々との出会いも、山崎さんの記録生活を彩りあるものにしている。毎週のように会う砧公園のバードサンクチュアリの顔触れとともに、見つけた鳥に感嘆の声をあげることも。みんなで行う観察は、また違う楽しさがある。

山崎さんが特に興味を持つのは、枯れ枝や倒木の中、樹皮の裏といった隠された部分だ。しゃがみ、立ち止まり、目を凝らしてくまなく見る。

「この枯れ枝をよく見てください。実はここにも、たくさんの小さな命が輝いているのです」

静かに潜む生命の息吹に目を向けること、それは自分を取り巻く自然をより深く知る道しるべとなる。記録は、誰もが手にすることができる自然界への招待状だ。

野鳥ボランティア

変転する自然の中に見出す新しい発見を未来へ

この一瞬を見つめ、書き留め、伝えていく。

快晴の青空のもと、多摩川に架かる鉄橋の上を東急田園都市線の電車がガタゴトと渡っていく。そんな穏やかな風景のなか、川原で双眼鏡を覗きこみ、熱心になにかを見つめる人々がいる。真っ直ぐな視線の先に見えるのは、華麗にはばたく野鳥の姿だ。

「多摩川では常時40種ほどの野鳥が観察できます。あれはアオサギ、あちらはユリカモメですね」

野鳥ボランティア代表の平俊雄さんの声が弾む。年に6回の多摩川の調査は、二子玉川駅をスタート地点とし、上流は狛江市との市境、下流は大田区との区境までをふたつのグループに別れて歩き、途中に見られる野鳥の種類と生息数を記録する。多摩川のほかにも、それぞれ年に数回ずつ、野川・仙川、砧公園など区内の公園・緑地での調査も行っている。

得られた調査の結果は、パソコンに精通する平さんがつくったデータベースを駆使し、メンバーたちによって着々と蓄積される。

2009年には、このデータを記録として残し、広く活用してほしいという想いから、古い文献、そして世田谷区民個人の調査記録や日本野鳥の会のデータをまとめて『世田谷の鳥』という報告書を作成した。また、ツバメの営巣数を継続的に追った記録やコアジサシの繁殖記録、オギの海と呼ばれるオギやヨシ原に生息する野鳥の調査など、意欲的に報告書をまとめている。データをまとめる過程は、鳥への知識が深まるだけではなく、保全活動の重要性を再確認することができる。例えば、多摩川のヨシ原の外来植物の除去活動は、ツバメのねぐら調査がきっかけとなった。ヨシ原の群落地は、やがて渡りをするツバメが体力づくりをするための「集団ねぐら」として重要な場所だ。その場所を毎年調査するなかで、ツル性の外来植物の被覆により、ヨシ原が駆逐されつつあることが判明した。以来、ねぐら環境を守りながらツバメを保護するために、外来植物の除去活動を続けている。

「記録を残さないと、すべてが闇のなかに消え、無になってしまう。記録を残すという行為そのものが大切な作業だと思います」

自然に囲まれて過ごした幼少時代から野鳥は身近な存在だったというメンバーのひとり、宮森達雄さんは常日頃から自宅周辺の野鳥を観察し続け、ノートにメモを取り記録に残している。

「自然はいつでも変転し、新しい発見があるからこそ記録する。この記録が野鳥やその生息環境を研究する将来の人たちへ、少しでも役立つものになれば」

自分たちが目にしたものをひたすら残し続ける野鳥ボランティアの記録は、一瞬しかない「今」を未来へと伝える。

1.鳥の姿や水の流れに心洗われる開放的な多摩川の風景。2.ヨシ原で体を休めるツバメ。観察会も開かれる。3.調査の相棒・望遠鏡は肩に担いで移動。観察のためなら、嬉しい重み。

1.二面護岸で中州のある仙川。鳥が安心して子育てできる。2.民家の屋根に止まるアオサギの姿。市街地でのこんな光景も、世田谷ならでは。3.背中の模様が美しいオナガガモも身近な存在。

特集
世田谷の
生き物を記録する

せたがや野川の会

調査＝川との触れ合いがもたらす「至福の時間」

網を振るえば、心はいつでも〝あの頃〟へ。

世田谷を流れる川のひとつ、野川は、国分寺崖線の湧水を集めて多摩川と合流する全長約20㎞の川だ。周辺にあるみつ池などの国分寺崖線の斜面林の環境と呼応するように多様な生物が息づき、同時に多くの人々の憩いの場としても親しまれている。自然豊かな野川の環境を守ろうと活動を続けるのは「せたがや野川の会」のメンバーだ。主な活動として、子どもたちに川の楽しさを伝えるための「せせらぎ教室」の開催や河川清掃、そして川の調査と川原の植物調査を行っている。

「川に入ること、それがとにかく一番楽しいんだよね」

そう言いながら網で水中をさらうのは、せたがや野川の会の立ち上げ当初から約8年活動を続ける井上純三さんだ。子どもの頃、網を担ぎ、わくわくしながら魚を追った記憶が忘れられずに、再び川に戻ってきた。実はこの「魚すくい」も立派な調査のひとつだ。川のなかで定点を決め、どんな魚やエビ、貝や水生昆虫がいるかを観察し続けている。

「オイカワがいた！」

そう告げる顔は、まるで少年のようにきらきらと輝いている。近くで真剣な面持ちで網を振るうのは、同じく会を当初から見守る今田裕実子さん。川底に棲む生き物を調べている。まず、目の細かい25㎝四方の網で川底の砂泥もろともすくいあげ、さらに石底についている水生昆虫も丁寧にこそぎ落として採集し、顕微鏡で微小な生物まで確認していく。

そんなふたりの横では、水温や水流が測定されている。水質の調査では、薬品を使って窒素含有量や金属量を量るほか、水の透明度も調べる。野川の中には、みつ池の湧水が流れ込んでいる。

野川とみつ池、どちらを知ることも重要だと感じる井上さんと今田さんは、成城みつ池を育てる会でも活動している。さらに、井上さんは野川流域の自治体や活動団体と連携した野川流域連絡会にも参加している。自治体を超えて情報交換や勉強会を行ない、さらに人脈が繋がることで、より多くの人間が同じ目的で進むことができる。また、様々な調査結果を行政へ情報提供することで、信頼を得ながら活動を進めている。

「野川は生き物と触れ合えて、自然に包み込んでもらえる場所。この場所にいる時間、調査をしている時間がまさに至福の時です」

野川に対する想いを語るふたりの笑顔、それは会を動かす原動力そのものにほかならなかった。

記録は、私たちにありのままの自然の姿を提示する。そこにある事実や新たな発見は、環境の保全へと繋がっていく。そして同時にその行為には、永遠に自然を残したいという人々の強い願いも込められている。

壮大な歴史の流れの中で、世田谷の人々は記録を続ける。刻々と変化し続ける自然、そして先人の想いを次の代へと手渡すために。

1.川の中に生息する生き物を調査するために投網を打つ。2.みつ池からの湧水が合流する地点での生き物調査。みつ池湧水路には、生き物の種類も多い。3.川底の石の裏にも、肉眼では見えない水生昆虫がたくさんいる。4.オイカワを発見。元気に泳ぐ姿に、みんなの顔がほころぶ。

1.採取した水に含まれる窒素の量を測定。薬品に反応する色の変化で確認。2.水の透明度を測定する器具。メンバーの創意工夫が光る手づくりの品。

特集
世田谷の
生き物を記録する

まち中の身近な自然を見続ける意味

常喜　豊［昆虫研究家］

まち歩き自然観察と桜丘すみれば自然庭園

私の現在の研究テーマは、熱帯にすむクロツヤムシという甲虫の分類と生態です。研究のフィールドは東南アジアの熱帯林で、そこに行けるのは大学の夏休み期間中だけとなり、1年の大半は首都圏のまちの中にいることになります。そこで、クロツヤムシの研究ができない間、まちの中で何か別の面白いことが調べられないかと思い、始めたのが「まち歩き自然観察」というものでした。

「まち歩き自然観察」というのは、何も特別なことをするわけではなく、散歩感覚でまちを歩きながら、目にとまった昆虫や鳥、花などの写真を撮ったり、自分の発見をノートに記録したりするものです。原生の自然が残る山の中での観察と違い、見られる生物が少なくて限られる、車が多くて危険、周りの人から奇異の目で見られるなどの欠点はありますが、逆に、安くて近くて観察時間も短くてよい、思い立ったらすぐに実行できる、遭難する危険性がなく重装備も不要、食糧や水がすぐに調達できるなど、良い点もたくさんあります。「見られる生物が少ない」と書きましたが、実はまちの中には予想以上に多くの生物が生息しており、山奥ではなかなか見られない面白い外来生物に出会うことも多いのです。

自宅のある川崎市周辺や、勤務先の大学がある世田谷区などを歩き、まち歩き自然観察が軌道に乗ってきた頃、世田谷トラストまちづくりの方から紹介されたのが「桜丘すみれば自然庭園」でした。ある日、すみれば自然庭園を訪ね、そこを運営する市民グループ「世田谷すみればネット」の方々と知り合いました。そして、毎月1回開かれるすみれば自然庭園の自然教育イベントに参加するうち、今回、本誌でも紹介されている「成城みつ池を育てる会」「野鳥ボランティア」「せたがや野川の会」の方々とお会いすることができました。

これらの方々とお話をして、地域の自然を見つめることの素晴らしさをあらためて感じた私は、自宅の最寄り駅である東急田園都市線梶が谷駅の周辺で、さまざまな花にやってくるチョウの行動の研究を始めました。データを採り始めて4年目になりますが、レポート程度の論文はすでに2報発表し、さらにチョウの訪花行動を指標として、生き物をよぶまちづくりについて考えていこうと思っています。生物学だけにこだわっていた私の世界が、少しずつ広がってきました。

誰でもできるまちの自然研究

さて、まちの中で自然を見ていくことには、一体どんな意味があるのでしょうか。まず、自分たちと同じ環境で暮らす生き物たちがいることに気づくことで、自分のまちがもっと好きになることです。また、1年を通してまちの自然を見ることで、季節感に乏しい都市環境の中でもはっきりとした季節の変化をみて取ることができます。

さらに、まちの自然観察で見つけた意外なものが、その地域の昔の姿を知る手がかりとなる場合があります。たとえば、道路の分岐点にある三角地帯の一角に突然ササが生えてきて、そのあたりが昔ササ原だったことが想像されたり、世田谷区の公園で糞虫の仲間のエンマコガネを見つけ、昔は世田谷のいたる所で飼われていた牛や馬の糞に集まっていたこの虫が、今では犬や猫の糞に頼って細々と暮らしているという時の流れを感じてみたりといったものです。

最後に、皆さんにまち歩き自然観察の勧めと、私なりの観察のポイントを書いておきます。本誌で紹介されている「成城みつ池を育てる会」や「せたがや野川の会」などの活動はかなり本格的で、そこまではやれないと思っている人は、まずは私のようにデジカメとメモ帳を持って気軽にまちを歩いてください。その際、私が重要と考えるポイントが2つあります。

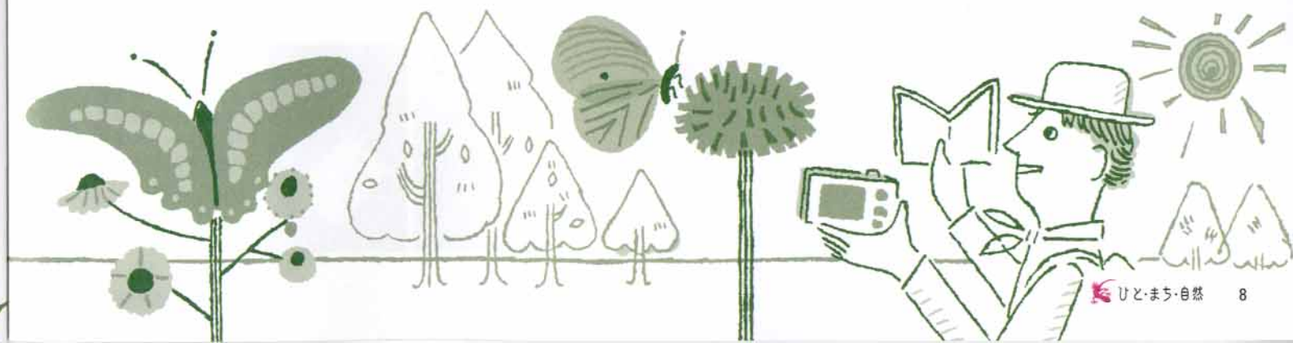
まず、いつまでも「珍しい虫」や「きれいな花」のままで置いておかず、少しずつ名前を覚えることです。もし自分が初めて見る昆虫や、ときどきは見るけれど名前がわからない花などがあったら、写真を撮ったりスケッチをしたりして、その日のうちに家で名前を調べましょう。ポケット版の昆虫図鑑、鳥類図鑑、野草図鑑などは、昔と違って非常に充実しているので、それらを使って1日に1種ずつでも名前を覚えていくだけで、観察の面白さが全然違ってきます。最近ではインターネット上でも写真入りで昆虫や植物を紹介するサイトが多いので、信用できるサイトは大いに役立ちます。

私が今調べている都市環境のチョウについて言うと、モンシロチョウ、アゲハチョウなどの他に、アオスジアゲハ、モンキチョウ、キタキチョウ、ウラナミシジミ、ツマグロヒョウモン、イチモンジセセリなど、十数種類のチョウの名前を覚えるだけで、簡単な調査ぐらいはすぐにできます。植物では、特に雑草の名前を少しずつ覚えることをお勧めします。名前を知ることで、それが単なる厄介者の草ではなく、派手な園芸植物よりもはるかに身近で愛すべき存在になってきます。

もうひとつのポイントは、今述べたこととも関係しますが、雑草に目を向けてもらいたいということです。私がチョウの調査を始めたひとつのきっかけは、ヒメアカタテハやキタテハなど、あまりまちのチョウらしくない種が通勤途中で目についたことでしたが、これらのチョウの幼虫はヨモギやカナムグラという雑草を食べて育ちます。鉄道線路脇の斜面に繁茂する雑草が彼らの生活を支えているわけで、あらためて雑草の偉大さを感じました。また、まち中の花壇を毎日見ていると、同じ雑草でもヤブガラシのようにすぐに抜かれてしまうものと、ポピー（ナガミヒナゲシ）やヒルガオのように、花や葉の形が良いといった理由からか、そのまま置いておかれるものとがあり、人の植物に対する価値観がわかって面白いです。

皆さんも、今までとは少し違った視点で、まちの中の自然を見てください。そしてそれをできるだけ長く続けることで、自分の住むまちがさらに魅力的なものとなるはずです。

常喜　豊　JOHKI, Yutaka
昭和女子大学大学院教授。専門は動物生態学、動物行動学。
1953年　和歌山市生まれ。
大阪大学理学部生物学科卒業。京都大学大学院理学研究科修了。理学博士。
東南アジアの熱帯林で、クロツヤムシという家族で暮らす甲虫類の生態を調べている。
主な著書に、『ボルネオの生きものたち』（東京化学同人）、
『虫たちがいて、ぼくがいた』（海游舎）、『森と水辺の甲虫誌』（東海大学出版会）など。

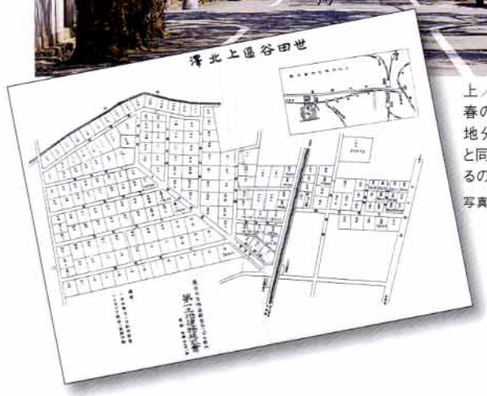


せたがや散歩日和 第10回

大正・昭和の住宅地の風景を探して

上北沢駅〜将軍池広場〜左内町分譲地〜八幡神社〜三井牧場跡〜桜上水五丁目〜桜上水駅へ

かつては同じ上北沢村だった上北沢と桜上水。
大正時代に特徴的な道路計画で開発された上北沢の左内町分譲地と桜上水を結ぶ間には、平安時代からの古刹や、のどかな牧場だった場所もあり、変化に富んだ散歩を楽しめる。
今回は「せたがや街並保存再生の会」の福澤清さんと、桜上水で生まれ育った桜上水五丁目自治会の櫻田滋さんに案内をお願いした。



上／桜のトンネルは上北沢の春の風物詩。下／左内町住宅地分割図。道路と街区割は今と同じ。駅から真っすぐ延びているのが桜並木の道。

写真・資料提供:上北沢桜並木会議

大正時代からの広大な敷地

松沢病院から将軍池広場へ

上北沢駅の南口へ出る。ひんやりとした風が頬に心地よい。「歴史ある街並みや建物は世田谷の原風景とも呼べる貴重なものです」と話すのは、今回の1人目の案内人、福澤清さん。「せたがや街並保存再生の会」の会員である福澤さんは、和服にマントを羽織った姿で登場。

「昨年春に建物は新しくなりましたが、当初の松沢病院の門柱だけは残っているので見に行きましょう」

京王線の線路に沿って歩き出す。ふいに強い風が吹き、澄み切った青空に木の葉が吸いこまれていく。こんなシーンから時間旅行へ出かける映画が昔あったような気がする。

このまちの大正・昭和の住宅地の風景を探す旅にはふさわしいオープニングだ。ツタの絡まるレンガを張った風格ある門柱が見えてきた。

「かつてはこの正門の前に松沢駅がありました」

90年以上前、この駅に降り立つと、19万㎡もの広大な敷地が目の前に現れ、一歩入ると作業療法など、自由で先進的な医療を導入していた病院があった。その歴史をつぶさに眺めてきた門柱だ。病院の敷地に沿って歩くと、将軍池広場が見えてくる。フェンスの向こうには将軍池。

「この池は病院の敷地内にあるので、地域の住民にとって普段は見ることのできない、幻の池でした」

病院改築の際に地元町会自治会で「池を眺められる広場を」と要望して実現した。大正時代に患者の作業療法で掘られた将軍池が、敷地の一部が広場になったことで、地域の人々や道行く人々も鑑賞できるようになったのだ。池の周囲の樹木も大きく育ち、野鳥も飛んで来る。水面に映る緑の葉がそよいで、静かな時間が流れている。秋には地元のお祭り「自由広場」が、ここでにぎやかに開催される。

大正、昭和の雰囲気が香る

左内町分譲地から岡さんのいえへ

将軍池広場から道路を渡って左内町分譲地と呼ばれた住宅地へ入り、中心部にある桜並木の道路へ向かう。

「桜並木は春になるとピンクに染まり、この一帯は一幅の絵のようになります」

住宅地内の道路は肋骨道路と呼ばれ、人体のように中心道路から左右斜め45度にそれぞれ4本ずつ幹線道路が延びているのが特徴だ。この住宅地は、地主だった鈴木左内の名前から左内町分譲地と呼ばれることになった。

「関東大震災のあと、第一土地建物という会社が開発した東京では早い時期の郊外住宅地です。道路の骨格は当時のまま。わずかですが開発当初の住宅も残っています」

京王線が開通して10年後に、関東大震災に見舞われた東京。復興後、都心から郊外に住まいを移す都市計画や、その頃登場してきた中産階級の住宅地の需要に応えるために、電車やバスで都心に通うことを想定して開発されたのだ。上下水道などのインフラが整備され、モダンで文化的な暮らしができると多くの勤め人や文化人が移り住んだ。

春に桜の花びらが舞い散るさまを思い描きながら、分譲地の道路を挟んで東側にある

写真提供:世田谷区立郷土資料館

写真提供:世田谷区立郷土資料館

上／1950年頃の松沢病院。門柱には「東京都立松澤病院」と書かれている。中／路面電車だった1950年頃の上北沢駅踏切。下／保存された門柱の前で和服にマントの案内人、福澤清さん。

1.広場側から見た将軍池。2.庭木も大きく育っている開発当初の住宅。3.肋骨道路。斜めにのびる道は当初のまま。4.移築再生された旧松沢教会礼拝堂内部。5.中庭に面した旧礼拝堂入口。木造の礼拝堂をコンクリート造で囲っている。

上北沢の桜並木

【かみきたざわのさくらなみき】

写真提供:上北沢桜並木会議

1984年の「せたがや百景」に選定。2002年には区内の魅力的な風景を地域住民とともに守り育むことを目指した、第1回地域風景資産に選定される。この選定をきっかけに、地域住民による桜並木の保全活動を行う「上北沢桜並木会議」が発足し、現在も住民や小学校等と協力しながら桜並木の清掃を含めた様々な活動が行なわれている。

区立将軍池広場

【くりつしょうぐんいけひろば】

2012年5月に開園した烏山地域で最大（約5,000㎡）の区立公園・広場。広場内には多くのベンチが設置され、将軍池を眺めながらのんびりとくつろぐことができる。また、健康遊具の他、地元の上北沢小学校、八幡山小学校の児童が作成した絵タイル340枚が貼られているところもあり、地域住民の新たな憩いの場となっている。

賀川豊彦記念松沢資料館へ向かう。コンクリート造の建物の中には、かつてこの地にあった旧松沢教会の木造の礼拝堂がそのまま保存され、室内にはステンドグラスから一筋の光が差し込んで、今にも讃美歌が聞こえてくるようだ。

社会運動家で生活協同組合の創設者であり、ノーベル平和賞の候補にもなった賀川豊彦。この地で後半生を過ごし、教会や幼稚園の活動を通じて、地域の人々に助け合って暮らしていくことの大切さを身を以て示した。

賀川が存命中に松沢教会に通って説話を聞いた岡ちとせさんもその一人。教会の近くに住んで、自宅で地域の子どもたちに英語やピアノを教えていた。岡さん亡きあと、親族が地域共生のいえ「岡さんのいえTOMO」としてまちにひらき、今年7年目を迎える。築約60年の昭和の家は、カフェや駄菓子屋の日もあり、子連れのお母さんや小学生に大人気。いつもにぎやかだ。

ここからは桜上水の住人でかつて岡さんの教え子でもあった櫻田滋さんが案内人。

「子どものころ、松沢教会にも岡先生のところにも通っていました。英語？忘れちゃったねえ」と笑う櫻田さんは、今は岡さんのいえの見守り隊員の一人だ。

1.「これ、僕です」岡さんのいえの前で1950年頃の記念写真を指差す案内人の櫻田滋さん。2.勝利八幡神社。3.子どもの背丈ほどの小さな旧社殿、小さいながらも優美な造り。4.区立緑丘中学校の校庭のケヤキ。5.江戸城の兄弟松。6.かつては北沢川が流れていた緑道。7.グラウンドの奥に桜上水団地が見える。かつてはここにサイロのある三井牧場があった。

世田谷にあった牧場や洋館

勝利八幡神社から桜上水駅へ

7本の道が交わる荒玉水道道路を渡って、勝利八幡神社へ。創建は1026年という区内最古の神社には、1788年に建てられた世田谷区の有形文化財である小さな旧社殿が保存されている。

「旧上北沢村の鎮守様である八幡様は、お祭りの縁日も昔からにぎやかで、子どもの頃は楽しみだったねえ」

由緒ある神社でお参りをし、運気をあげて区立緑丘中学校へ向かう。広い校庭にはケヤキの大木が2本立ち、枝を風に揺らしている。

「私の母校です。このケヤキは世田谷区発行の冊子『世田谷名木百選』でも紹介されています」

道を隔てて隣には保育園があり、立派な松が道に幹をのばしている。「この松は江戸城と同じ松といわれているんだよね」

この辺り一帯も先ほどの左内町分譲地の地主だった鈴木家の所有する土地。鈴木家は大地主であるとともに、江戸城出入りの植木屋でもあった。寛永年間に江戸城に納入された松と同じ時代の松が、今もこうして幹や枝をのばしている。旧家のケヤキと江戸城の兄弟松。今は中学校の子どもたちや道行く人を見守る。

北沢川を暗渠（あんきょ）にした緑道を歩く。飛行機雲が見え、空が広い。日本大学のグラウンド、その向こうには桜上水団地が広がる。

「ここには三井牧場があってね、僕も子どもの頃ここで牛乳を買った。アカシアの並木やサイロがあって、まるで外国のようだった」

東京に住む三井家の人々に牛乳を提供するために1914年から50年近く、牧場がここにあったのだ。

牧場を思い浮かべながら桜上水五丁目の住宅地へ。ここもまたかつては鈴木家の土地。住宅地として開発された時期も上北沢とほぼ同じだが、空襲を受けた歴史があるためか、当時を偲ばせる建物はほとんど残っていない。

「桜上水五丁目の道には愛称がついています。僕もその活動に関わったんです」と通りの名前が書かれたプレートを指差す櫻田さん。自治会で防災訓練をした際に、現在地を知らせ合う難しさを感じた。何かあった時にお互いの居場所を知らせるためには、道や坂に名前があった方がわかりやすく、まちの特徴にもなると2009年、世田谷まちづくりファンドを利用してプレートを取り付けた。そのひとつ「タッピング坂」を上る。

「ここにはヘレン・タッピングさんが住んでいた3階建ての洋館が建っていました」

賀川豊彦を通訳などでサポートし、この地で過ごした宣教師、タッピングさんが暮らした洋館は、「ゆうやけ道」と交わる小高い丘の上にあった。夕日に照らし出される洋館が櫻田さんの目には、はっきりと映っているかのようだ。緩やかな「えきみなみざか」を下って今回のゴール、京王線桜上水駅に到着。

松沢資料館に展示されていた賀川豊彦の自筆の書には、「ひとりは万人のために。万人はひとりのために」と記されていた。みんなが平等に益を得る協同組合の仕組み。震災復興後のまちづくりとして開発された特徴的な街区の左内町住宅地。親しみがもてる通りの名前を付けた桜上水五丁目の住宅地。支え合い、安らぎのある暮らしを求めた人たちの想いが、今も息づく散歩道だ。人々のつながりが希薄になっている現代だからこそ、私たちは大正や昭和のまちづくりから発見するものがたくさんあるのかもしれない。

桜上水五丁目住宅地。住民の協力により、家々の生け垣や塀に通りや坂の名前のプレートがついている。

桜上水五丁目の道

【さくらじょうすいごちょうめのみち】

桜上水駅の南側へ緩やかに広がる傾斜地に沿った5つの「坂」、線路と平行に走る7つの「道」、計12の道に愛称がついている。花火坂、そよ風坂、つつじ道、福音寮道、横の道、ゆうやけ道など、住民800世帯にアンケートをとり、それぞれの通りの特徴が愛称となった。72枚の愛称プレートと10枚の案内板が設置されている。

三井牧場

【みついぼくじょう】

写真提供：世田谷区立郷土資料館

1914年、東京に住む三井一族100人ほどに牛乳を供給するために開設された。東京ドーム2倍分の広大な牧場で飼っていた牛は、わずか10頭ほど。オランダ風の建物と当時は珍しいサイロもあり、ここだけ異国情緒を漂わせていた。戦後は一般にも牛乳が販売され、近隣住民にも親しまれた牧場は、1962年に閉鎖され、跡地には桜上水団地が誕生した。

賀川豊彦記念松沢資料館

【かがわとよひこきねんまつざわしりょうかん】

賀川豊彦が関わった事業活動、著作に関する膨大な資料を収集、整理保存し、一般公開している。原資料とパネルによる常設展示の他、1931年竣工の旧松沢教会礼拝堂も移築保存され、見学することができる。（上北沢3-8-19）　開館日時：火～土曜日（祝祭日も開館）、10時～16時半（入館は16時まで）入館料：一般・大学生300円／小中高校生200円　http://zaidan.unchusha.com/

手から手へ
人から人へ
結び葉
第⑩回

井山俊司さん

空き地と見まごう農園には大きな秘密が隠されている？

ここは原っぱ？

草が生い茂り、サワサワと風に揺れている。その向こうに井山俊司さんが笑顔で立っている。ここは鎌田にある「せたがや自然農実践倶楽部」。井山さん、いたずらっ子のように目をキラキラさせ、足元の土を手のひらにひとつかみ。「この土の中に微生物が何匹いるか当ててみて」とニッと笑う。100？　200？　いえいえ70億匹だそうで。井山さんの手のひらに、地球の総人口ほどの微生物が生きている。

「僕たちは、この微生物の力に任せて畑をやっているんです」

なんだかここにはとてつもない秘密が眠っているようだ。

井山さんのことを、「せたがや自然農実践倶楽部」の人たちは「ゴンジさん」と呼ぶ。土地の農家17代目のゴンジさんは、朝から晩まで鋤や鍬をふるうのが「楽しくってしょうがない」少年時代を送ったそうだ。やがて社会人となり、製鉄会社に就職。土を鉄に変え、プロジェクトの先頭に立ち世界中を飛び回った。世界中の人々に出会うことも「楽しくってしょうがない」日々。そんなゴンジさんに次なる出会いの扉が開く。

母親の病気をきっかけにマクロビオティック料理（旬の野菜と玄米を中心にした食事）と出会い、そして自然農法とも出会った。自然農法とは、不耕起（耕さない）・無農薬・無肥料で、その土地に見合った作物を育てる、というよりは育つのを見守る農法だ。

「このネギは3年目、このイチゴは2年目だね」ゴンジさんが指差す先には冬を越え、夏をやり過ごした強者（つわもの）の野菜や果物たちが育っている。ゴンジさんによると、今どきの種子は化学肥料や農薬がなくては育たなくなっていて、種子を蒔いてみると、発芽せずに消えてしまう種類がいくつもあるのだそうだ。その中で、生き残りたくましく育ったものをここで収穫し、種子を残していくやり方だ。

人も作物も、未来の実りを今育てる

畑と集合住宅が混在する鎌田で、17代目農家が自分の畑で始めたのは自然農法。作物を育てていくうちに、人も虫も作物もみんなが共生する、和やかで楽しい場が生まれた。

様々な世代、職種の人が集まって畑仕事に勤しむ「せたがや自然農実践倶楽部」の井山俊司さんを訪ねた。

休耕地を使った自然農法に集う多彩な人々

ゴンジさんは退職後、休耕地になっていた先祖から受け継いだ土地を使って「せたがや自然農実践倶楽部」を発足。本格的に自然農法に取り組むことになった。同時に公益信託世田谷まちづくりファンドの「はじめの一歩部門」を利用することで、ブログを開設し、活動をオープンにした。現在、会員は50名ほど。入会金の他に月々の会費を払うことで、作付けや管理や収穫にかかわることができる。毎週日曜日の作業日には、遠方から、ご近所から様々な職種、様々な年齢の人たちが集まって畑仕事に勤しむ。

「畝（うね）の中は自然界」と想定して、星の数ほどの微生物に土の状態は任せる。それで最初に目にした原っぱのような光景が広がっている、というわけだ。それにしても、雑草の中の野菜たちの元気なこと。ネギは青々と天に向かって真っすぐ伸び、落花生は殻を割ったとたんに甘い汁があふれてくる。「こいつらも雑草だからね」と笑うゴンジさん。そういえば野菜は野の菜と書く。もともとは野にあった雑草を、遠い祖先が採取し、自分たちの暮らしの場に植え替え、食用に適するものが野菜になっていったのだ。ゴンジさんは逆に野にあった状態に戻していっているのだろう。雑草という言葉だって人間から見た言い方なのだ。

自然がもたらす豊かな実りを仲間と共有する楽しさ

こういった農法はまだまだ一般的とは言えないため、ストイックなイメージが先行するが、ゴンジさんだけでなく関わる仲間のみなさんに漂う雰囲気は、おおらかであたたかい。そして異口同音に「ここで採れたものはおいしい！」それがみんなを結びつけている一番の理由だろう。

「まちに開いた農園で、気の合う仲間と一緒に、ここの土にあった作物を種から育てている。楽しくってしょうがないね」

ゴンジさんにとっては人のつながりもまた、豊かな実りの一部なのだ。自然農法に共感する人や場所は増え、2012年からは千葉の成東で田んぼ作りも始まった。秋の収穫祭では、成東でとれた餅米で餅つきをし、落花生やサツマイモを掘る。土の中から出てきた虫を追いかけまわしていた子どもがふと足を止めた。蒸しあがった餅米からもうもうと湯気が上がっている。

「パパ、お餅ってごはんからできているんだね」

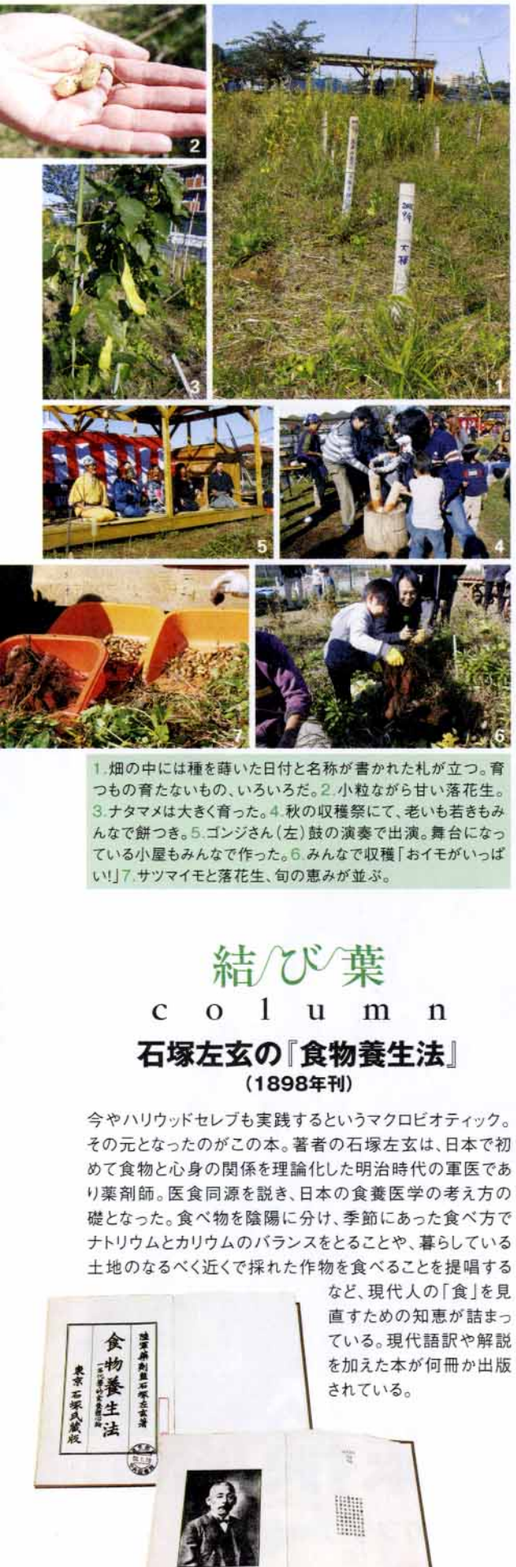
この日、大きな発見をした少年のつぶやきが、ゴンジさんたちが汗を流してきた農園の秘密を語っていた。未来の種子が今ここで育ち、収穫されているのだ。

「僕たちが作っているものは商品ではなく、食べ物なんです」

きれいな形の野菜は採れなくても、土の力と太陽の光と雨だけで野菜を育てていく。それはたとえ小さな農園であっても、自然の恵みで育った作物によって人は生かされていること、心身をいい状態に保ってくれることを私たちに気づかせてくれる。

帰りがけにゴンジさんが摘み取ってくれたホップは、あざやかなマスカット色。さわやかな芳香をいつまでも放っていた。

「せたがや自然農実践倶楽部」の畑で「ほら！甘いよ」満面の笑み、井山俊司さん。



1.畑の中には種を蒔いた日付と名称が書かれた札が立つ。育つもの育たないもの、いろいろだ。2.小粒ながら甘い落花生。3.ナタマメは大きく育った。4.秋の収穫祭にて、老いも若きもみんなで餅つき。5.ゴンジさん（左）鼓の演奏で出演。舞台になっている小屋もみんなで作った。6.みんなで収穫「おイモがいっぱい！」7.サツマイモと落花生、旬の恵みが並ぶ。

結び葉 column

石塚左玄の『食物養生法』（1898年刊）

今やハリウッドセレブも実践するというマクロビオティック。その元となったのがこの本。著者の石塚左玄は、日本で初めて食物と心身の関係を理論化した明治時代の軍医であり薬剤師。医食同源を説き、日本の食養医学の考え方の礎となった。食べ物を陰陽に分け、季節にあった食べ方でナトリウムとカリウムのバランスをとることや、暮らしている土地のなるべく近くで採れた作物を食べることを提唱するなど、現代人の「食」を見直すための知恵が詰まっている。現代語訳や解説を加えた本が何冊か出版されている。

子ども生きもの探検隊

秋の収穫祭編

トラスト子ども会員のみんなと楽しもう!

花のスペシャリスト、藤正喜久子さんと行くある日のフラワーランド

自然ゆたかな世田谷では、秋にいろいろな植物が実りをむかえます。
今回は瀬田にあるフラワーランドで、藤正さんとカリンジャムづくり!
さぁ!みんなも家族や友達と自然の実りを楽しもう!

収穫したカリン

カリンの収穫は10〜11月がベスト。表面が黄色くなってベタベタしてきたら、収穫どき!
ジャムやお酒を作るのに使われることが多いんだよ!

カリンにはノドの痛みを和らげる成分が入っているんだよ!

子どものページ

ジャムづくり

子どもたちみんな真・剣!!

手順❶

カリンをよくあらってタテに4つに切る。さらにそれぞれ厚さ1cmに切ろう!

手順❷

切ったカリン、種を鍋に入れ、全体がつかるくらいの水でやわらかくなるまで煮るよ!

種にはペクチンという成分が含まれていて、これが煮汁をトロトロにしてくれるんだよ!いっしょに入れるのを忘れずにね!

手順❸

カリンがやわらかくなったら煮汁をザルでこして、さらにさらし木綿の袋でこす!
熱いので気をつけよう!ゴム手袋をつけてね。

手順❹

こした煮汁に砂糖を入れて、さらに煮つめていこう!

※カリン1kgあたり砂糖500g

ちょっとお味見

手順❺

キレイなルビー色になったらできあがり!

キレイなジャムにするために表面にういてくるあくをとるのも忘れずにね!

みじん切りにしたハーブとクリームチーズをまぜあわせ、ハーブチーズも作りました!

できあがったジャムとチーズの試食タイム♪

※今回は特別にフラワーランドのカリン・ハーブを収穫して行いました。

トラまち topics

トラストまちづくり課の下半期（2012年9月から2013年3月まで）のトピックスをご紹介します。

12カ所目の地域共生のいえ「在林館（あるりんかん）」が羽根木二丁目に誕生しました

住宅地の一角、生垣のアプローチを進んだ先にある平屋の離れ。在林館は、この環境とともに居心地のいい地域のギャラリーを目指して、1月にオープンしました。オープニングイベントには保坂区長も来訪。昭和初期の分譲地という立地にちなみ、展示されているまちの歴史や母屋の図面などを来訪者とともに楽しみました。今後、地域の人々の交流や発信の場として、大切に育まれていくことでしょう。

12カ所目の「市民緑地」が大原に春誕生予定です

環状七号線と井ノ頭通りの交差点近くの大原に、新しい市民緑地が誕生します。柳澤君江さんが生前暮らしていた邸宅（国登録文化財）の庭を、故人の想いに沿ってそのままの形で残し、市民緑地として公開します。手入れの行き届いた回遊式庭園で、庭の奥には邸宅も保存されていて、君江さんが愛した風景を残した市民緑地です。

●所在地／世田谷区大原1-26-1
●開園時間／午前9時～午後5時（11～3月は午後4時迄）
●公開開始／平成25年春を予定

「小さな森」が新たに2カ所誕生しました

成城四丁目と尾山台二丁目に新たに「小さな森」が誕生しました。これで尾山台二丁目には2カ所、区全体では10カ所となりました。個人の庭から、みどりを守る輪が、世田谷各地にさらに広がることを期待しています。公開日にはぜひ足をお運びください。

20周年を迎えた世田谷まちづくりファンドの記念イベントを開催

12月1・2日(土・日)、キャロットタワーで「ファンドがひらいた世田谷のまちづくり～20年とこれから」を開催しました。区民参画のもとで企画されたこのイベントには、延べ約300人が参加。今後の区民によるまちづくりや、それを支援するまちづくりファンドのあり方について、活発な意見が交わされました。これからも区民に開かれた場で話し合われることの必要性が、参加者全員で共有されました。

「世田谷トラストDAY」を開催しました

2月3日（日）成城ホールにて「世田谷トラストDAY」を開催。176名の参加がありました。銀座ミツバチプロジェクト理事長・高安和夫氏による「ミツバチがつなぐ銀座里山物語」の講演や、野鳥ボランティアによる「世田谷の自然発見！～野鳥編」のスライド上映を行いました。また、みどりと歴史的文化的環境の保全を区民とともに進める世田谷トラスト運動の1年間の取り組みについて報告を行い、さらなる参加を呼びかけました。

世田谷まちづくりファンド「災害対策・復興まちづくり部門」活動成果の発表会を開催

3月2日(土)に「東北の被災地に学ぶ」と題し、ファンドの「災害対策・復興まちづくり部門」活動成果発表会を成城ホールにて開催。約100名の参加がありました。第1部は助成4団体の報告と世田谷への提言。第2部では、世田谷の災害対策まちづくりについて会場全体で意見交換を行ないました。用意した8m幅の模造紙は最終的に「市民ならではの提言」で埋め尽くされました。

「世田谷トラストまちづくり大学」都市の中のみどりを守り育む手法を学ぶ 緑地保全コースを開催

今年度は「崖（がけ）の林」「梅林」「いらか道」の3つの市民緑地をフィールドに、緑地保全の実践者養成講座を開催。緑地の周辺環境や地域の特色を知り、保全・活用方法の違いを学び、今後の緑地づくりについて考えてもらいました。実践経験を積んだ修了生のみなさんとともに、これからもより魅力ある緑地づくりが行われることを期待しています。

せたがや町並み探検隊 まちの成り立ちと近代建築をたどる

世田谷のまちの成り立ちや近代建築を知っていただこうと、今年度から新たにスタートした「せたがや町並み探検隊」。10月27日（土）に第1弾「田園調布の町並みと奥沢・海軍村」、12月1日(土)に第2弾「崖線沿いに立ち並んだ近代別邸建築」を開催しました。ふだん何気なく歩いているまちも違った視点で眺めると新たな発見があったようです。参加された皆さんから「楽しかった」との声をいただきました。

「瀬田四丁目広場利活用ワークショップ」進行中

世田谷区では、昨年度より瀬田四丁目広場を、学び・遊び・活動ができる利活用の拡大を考える「瀬田四丁目広場利活用ワークショップ」を開催しています。施設管理受託者でもある当財団もワークショップのメンバーとして、区や地域住民などの活動団体と共に、利活用方法を検討し、イベントの開催や、そのサポートを行っています。本年2/19～3/3までは、財団企画で「ひな祭り」を開催しました。

※当財団の事業については、財団ホームページでご覧いただけます。 **http://www.setagayatm.or.jp/**

他課からのお知らせ

このコーナーでは、住まいづくり課と管理課の情報をお知らせしていきます。

報告

区営住宅の「地域コミュニティサポート」事業として健康体操などを実施

住まいづくり課では、区営住宅の管理を行なっています。その一環として区営住宅自治会とまちづくりグループなどが連携し、居住者同士や地域住民とのコミュニティ促進を図るための「地域コミュニティサポート」を実施しています。毎年、区営住宅内集会室で、音楽会や健康体操などを開催しています。また、居住者の防災力を高めるための防災サポートとして、消防訓練・防災教室も各住宅で実施しています。

募集

せたがやの家 先着順入居者随時募集

せたがやの家（中堅所得のファミリー世帯向けの公的住宅）では、先着順にて随時申込みができる物件があります。世帯の所得に応じて、家賃の一部が助成され、礼金・手数料・更新料も無料となります。申込資格や物件詳細については、下記ホームページより「せたがやの家先着順募集物件一覧」をご覧ください。詳しい内容については、下記担当までお問合せください。http://www.setagayatm.or.jp/housing/index.html
せたがやの家担当　03-6407-3302

三軒茶屋キャロットタワー駐車場リニューアルオープン

財団が管理するキャロットタワー駐車場が、平成25年4月1日、リニューアルオープンします。ナンバー自動読み取り式ゲートや空き区画の案内灯などを新たに設置し「利用しやすい駐車場」に生まれ変わります。また、自動二輪車の駐車スペースの新設のほか、環境に配慮したエコ設備として、場内照明のLED化やカーシェアリングの導入も行います。ぜひ一度ご利用ください。
営業時間　7:00～23:00　年中無休
駐車料金　30分／~~250円~~　300円
駐車場については下記にお問い合わせください。
キャロットパーク管理室　03-5486-2311

あなたもぜひ、トラスト会員に!

世田谷のみどりや歴史を守り育て、次世代に引き継ぐ「世田谷のトラスト運動」をささえるトラスト会員になりませんか。

会員種別と年会費

- 個人賛助会員：1年会員　1口1,000円　3年会員 1口3,000円
- 家族賛助会員：1年会員　1口2,000円　3年会員 1口6,000円
- 法人賛助会員：1年会員　1口10,000円　3年会員 1口30,000円
- 子ども会員：小学校在学期間1,000円
- 学校会員：無料 ※区内の小中学校が対象

会員特典

1 会員証発行 ※学校除く

2 情報誌「ひと・まち・自然」等の送付 ※希望者に送付します。情報誌等は財団HPからもダウンロードできます。

3 事業協力者からのサービス提供 ※詳しくは当財団までお問合せください。

提携美術館インフォメーション

トラスト会員の方は、優待制度がご利用いただけます。
提携美術館では、以下の展示が予定されています。

世田谷美術館 ☎03-3415-6011	**『暮らしと美術と高島屋』展** **～世田美が百貨店のフタを開けてみた。** 4月20日(土)～6月23日(日)
世田谷文学館 ☎03-5374-9111	**『上を向いて歩こう』展** 4月20日(土)～6月30日(日) **『没後80年 宮沢賢治・詩と絵の宇宙―雨ニモマケズの心』展** 7月13日(土)～9月16日(月・祝)
静嘉堂文庫美術館 ☎03-3700-0007	**『旅の文学―紀行文にみる旅のさまざま―』** 4月13日(土)～5月12日(日) **『せいかどう動物園―いきものをめぐるイマジネーション―』** 5月25日(土)～7月15日(月・祝) ※7月16日(火)～10月4日(金)まで夏期休館

※展示内容など、詳細につきましては直接各施設にお問い合わせください。

ご寄付のお礼

2012年9月1日～2013年2月28日までに、会費と一般寄付で、総額2,917,595円のご寄付をいただきました。どうもありがとうございます。今後も引き続きご支援の程、よろしくお願いいたします。

エコポイント環境寄付について

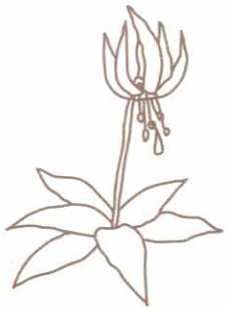
当財団は、国の「復興支援・住宅エコポイント事業」及び「住宅エコポイント事業」の環境寄附対象団体となり、エコポイントを利用した商品取得と同じ手続きで、ご寄附をいただくことができます。詳細については、当財団までお問合せいただくか、ホームページをご覧ください。

せたがやの宝物

カタクリ

【ユリ科カタクリ属】

静かに春を呼び起こす林床を彩る乙女たち



もののふの　八十娘子らが
汲みまがふ
寺井の上の　堅香子の花

大伴家持

現存する最古の和歌集『万葉集』の中に、堅香子と呼ばれる花が登場します。これは現代でも存在するある植物を指しているのですが、どんな花のどのような姿を思い浮かべるでしょうか。

その植物とは春を告げる花、カタクリです。堅香子には傾いた籠、という意味が含まれ、斜め下向きにうつむき加減で開く花の形からそのような呼び名がついたと言われています。和歌に詠まれていることから、カタクリは昔から人々の生活に寄り添う、ごく近しい存在であったことが推測できます。

厳しい寒さが影を潜める頃、カタクリは陽差しのよく満ちる明るい林床に群生で現れます。少し遠くから眺めると、花弁の赤紫色があたり一面に広がる光景に出会えるはずです。さざめくようなその姿は、まるで待ち遠しかった春を謳歌し、おしゃべりを始めた乙女たちのようにも見えます。

約2週間の開花を終え、ひと月ほど経った頃、白や紫の模様が美しい長楕円形の葉が枯れ始めます。地上部が枯れた球根の状態で、土中での暗く長い休眠活動に入るのです。球根のなかには、良質の澱粉が含まれています。これはかつて、片栗粉の原料とされ、民間薬としても珍重されていました。

毎年春を呼び覚ますその姿は、世田谷でも限られた場所で密やかに息づいています。驚くべき自然の営みは、私たちのすぐそばで繰り広げられているのです。

上／恥じらうようにしとやかに咲くカタクリの花。下／地面に現れる赤紫色の絨毯は、春の訪れの目印。

ひと・まち・自然
トラまちPress　Vol.10　2013年3月発行

発行／財団法人世田谷トラストまちづくり
編集／財団法人世田谷トラストまちづくり　トラストまちづくり課

〒155-0031 東京都世田谷区北沢2-8-18 北沢タウンホール7階　Tel.03-6407-3311、3313　Fax.03-6407-3319
http://www.setagayatm.or.jp/

編集協力
松井編集室

デザイン
牟田 厚

取材・文
大木茉莉（p2〜7／p20）
小池良実（p10〜15）

写真
佐藤隆俊（p2〜7／p13）
松井晴子（p11〜12／p14〜15）

イラスト
来迎純子（表紙／p8〜9／p20）
南樹里（p13）

ⓒ財団法人世田谷トラストまちづくり
2013 Printed in Japan
本誌掲載の写真・記事等の無断転載および複写を禁じます。

世田谷区が進める「世田谷みどり33」に連携し、みどりの保全・創出に取り組んでいます。